

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

Table with 4 rows: 事業所番号 (0170400097), 法人名 (社会福祉法人 宏友会), 事業所名 (グループホーム風車の家(ユニットA)), 所在地 (札幌市西区宮の沢490番地87), 自己評価作成日 (平成25年6月10日～8月23日), 評価結果市町村受理日 (平成25年10月2日)

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度の公表センターページで閲覧してください。

Table with 2 rows: 基本情報リンク先URL (http://www.kaigokensaku.jp/01/index.php?action=kouhyou_detail_2012_022_kani=true&JigyosyoCd=0170400097-00&PrefCd=01&VersionCd=022)

【評価機関概要(評価機関記入)】

Table with 3 rows: 評価機関名 (特定非営利活動法人 福祉サービス評価機構Kネット), 所在地 (札幌市中央区南6条西11丁目1284番地4 高砂サニーハイツ401号室), 訪問調査日 (平成25年9月17日)

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

- ①入居者が一人の人として当たり前の生活をしていく為の支援に力を入れている。
②職員一人一人の個性を大切にしながら一つのチームとして協働できる関係作りを目指している。
③同法人内で、訪問介護、通所介護、特養、ケアハウスなどの各事業が展開されていることで、利用者の方の状況や希望に応じた居場所を提供しやすい環境にある。
④建物は自然豊かな場所にあり、隣接している同法人特養の庭では散歩やバーベキューを行なっている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は平成11年の開設であり、市内では早い時期のグループホームとして創設され、モデルケースとしても注目されてきた経緯がある。ホームは手稲山系の山裾に位置し、豊かな自然と静かな環境に囲まれた落ち着いた立地下にあり、野生動物も共生する自然と一体になった生活が営まれている。当事業所の優れている点は、ひとつに多種多様な介護サービスを行っている母体法人との協力関係にある。利用者の状況や状態を踏まえた介護サービスの利用が可能で、閉じ込めない介護として希望に添うサービスの選択が、終末期介護を含め利用者側に委ねられ、本人や利用者家族の意向を中心にした介護が進められている。またケアについても繊細な気配りが行われ、例えば入浴後は必ず新しいお湯を張り、次に利用する人の心も体も清潔面も気持ちの良さを提供するよう努めたり、食事の始まりのあいさつや、配膳下膳、お茶の提供に到るまで利用者の本位にお願いする黒子ケアに徹したりと、最良と最善を常に求めようとする方向が見られ、経験に居座らない前向きの姿勢に、今後も大いに期待したい事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

Table with 4 columns: 項目, 取り組みの成果 (該当するものに○印), 項目, 取り組みの成果 (該当するものに○印). Rows 56-62 detailing staff, user, and family satisfaction metrics.

自己評価及び外部評価結果

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	昨年度、職員全員で意見を出し合い、地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念の項目を追加した。それと同時に今までの理念も見直し、より解かり易いような表現にした。理念は職員全員が暗記をし、ケアプランに反映させたり、支援に迷った時に振り返るツールとなっている。	地域密着の理念を職員全員で意見を出し合い、今までの理念に追加し共有している。理念にそって地域の一人として事業所を活かしていくよう職員一丸で取り組んでいる。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	公共交通機関を使った外出は年々その幅を広げているとともに、近隣の喫茶店やスーパーへの出入り、町内会の催しにも積極的に参加している。最近では、周辺地域や外出先の住民より声をかけて頂いたり支援への配慮をして頂いたりする事が増えている。施設での避難訓練や行事に地域住民の参加がある。	事業所が山裾であり人家の密集地ではないため、日々の触れあいは少ないが、町内会の行事には欠かさず参加し、また事業所の催しにも地域住民の参加も多く、交流を深めている。	住宅地がまばらな地域であり、工夫を要する地域作りが必要と思われる。近距離に保育園があるため、保育園との施設レベルでの交流や、お年寄りや園児という個別レベルでの触れ合いなど、創造性豊かな地域特性が見られる様な積極的姿勢に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等において情報提供の場はある。また、RUN伴への初参加等で、実際に入居者の生活や支援を生で見て頂く事も地域貢献ととらえ積極的に取り組んでいる。新たに理念に“地域づくり”を追加した事もあり、今後も様々な方法にて施設や認知症についてのアピールを行ない、理解者を増やしたい。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では行事報告と、毎回テーマを決めた話し合いをしていると共に、施設行事への参加や家族会に似た形態も適宜取り入れている。議事録は、家族・職員がいつでも閲覧できると共に、職員会議で情報共有している。実際に会議で出た意見を組み入れ、それに沿った行事を開催したケースも幾つかある。	各代表者の出席を得て、定期的に開催している。議事録については、各委員や家族に送付している。懸案事項についても積極的に論議を願い、出された意見等は職員間で共有しながら実践できるよう検討している。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者は、市や区の会議に毎回参加できている。また、日頃から市の担当者には積極的に相談をするようにしている。	介護の更新申請時や、区との会議時に意見交換を行っている。包括センターは運営推進会議に出席しており、なんでも話し合える関係は築かれている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	常々“本人はどう思っているのか”という視点を意識し、入居者の自発的な活動の支援に努めている。玄関の施錠は、夜間のみ防犯上行なっているが日中は自由に入出りできる。職員は、身体拘束に関する施設内外の研修に参加する環境があるとともに、昨年度は、グループホームという施設で取り組む“身体拘束をしないケア”について、法人内研修で発表する場もあった。	法人母体での研修を軸としながら、日々のケア、日常的な動作で言葉や態度による抑制がなかったか職員同士で点検している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法については、施設内外の研修において学ぶ機会はある。特に今年度は、専門職としての基本的な言動の徹底について事業計画にも挙げ、計画的に取り組んでいる。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	近年、成年後見人制度を活用している入居者が増え、必然的に制度を学ぶ機会も増えているが、その対応は管理者が中心となっている為、職員一人一人が制度の理解を深める為の自己啓発を行なっていくことが今後の課題と考える。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居者や家族には、出来る限り事前に施設を見学して施設の雰囲気を覚えてもらってから契約してもらうようにしていると共に、契約締結時・解約時には十分に話し合いの場を設けている。		
10	6	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日々の会話、運営推進会議、ケアプラン作成時、行事後のアンケート等において、積極的に要望を知る機会を設けている。実際に、会議で出た意見を組み入れ、それに沿った行事を開催した事例がある。入居者の要望に関しては、積極的にそれを引き出す為の支援が足りないと感じる。今後の課題である。	家族の来訪時やケアプランの確認時に意見の聴取を求めており、また行事の後にも感想を含めたアンケートを実施しており、お便りの反応を含め、意見や要望は真摯に受け入れ共有する体制を築いている。	
11	7	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員は、事例発表会への参加や自主発表会の実践等により、自発的な発言力を持つように取り組んでいる。管理者は職員会議や日常の会話、定期面談から職員の意見等をくみ取る努力はしているがその力は足りず、管理者と職員との意思疎通がスムーズにできていないと感じる事も多い。また、昨年度より、法人研修部企画の職員満足度調査が実施された為、結果の反映を今後期待したい。	会議や打ち合わせの時間を利用するなど、多角的に職員の意見や要望を聞き取る体制を常に敷いており、職員満足度調査も実施し提案の機会を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の様々な思いは有るが、法人は、定期的な昇給、勤務年数に応じた表彰など職場環境の整備に努めている。昨年度より、法人研修部企画の職員満足度調査が実施された為、結果の反映を今後期待したい。また、法人に求めるだけでなく、職員が自分自身、法人の一職員として何を求められ、何をしていくべきなのかについて、考える事も必要であると感じる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内職員全体の研修や勤務年数にあったキャリア別研修など施設内の研修は充実している。施設外の研修においても、職員個々の能力や状況、施設の課題に沿った研修への参加ができる。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は会議等にて、職員は外部研修への参加などを通じて同業者と交流する機会はあるものの、勤務状況や職員の力量などにより、参加できる職員が少ない。リーダーは、昨年度、法人内のキャリア別研修において、他施設への見学に行っている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の事前訪問時や、関係者から得た生活等の本人情報には、職員は必ず事前に目を通すとともに、必要に応じてケアプランに反映させるなどし、その把握に努めている。また、情報だけに囚われないよう、積極的に本人との関わりも大切にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族にも出来る限り事前に施設を見学してもらい、施設の雰囲気を知ってもらうようにしていると共に、契約前には十分に話し合いの場を設けている。また、入居者の初回ケアプランの期間は3か月に設定している為、契約後3か月後にはカンファレンスで家族の想いを聞く場がある。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居者や家族には、出来る限り事前に施設を見学して施設の雰囲気を見てもらってから契約してもらう。事前相談の時点では十分に家族や本人と話し合い、その時点の本人にとって何が最善かという事について考えると共に、時には施設入所以外のサービス利用の提案や、他施設の紹介も行なっている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員・入居者ともに得意分野を活かしながら、出来る事は自分で行なうという姿勢で生活している為、助けたり、助けられたりという関係が自然と生まれていると感じる。しかし、時には「介護者」と「介護される側」という意識が現れた言動になっていることも多く、今年度は特にその是正に力を入れている。		
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	今年度より毎月送付する家族宛の手紙の中に、ケアプランとプランのサービスに沿った画像の添付を始めた。その他、幾つかの行事には家族参加を促す他に、基本的に病院受診は家族対応としており、家族が「預けっぱなし」という気持ちにならないように努めている。		
20	8	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	センター方式の活用により、馴染みの場所や人の把握に努めている。基本的に面会や外泊等も自由で、実際に、職員付添いにて入居者が、奥様のいる施設に面会に行くこともある。ただ、勤務の都合上本人の希望通りのタイミングで出掛ける事ができない事も多く、更に入居者の馴染みの人や場所への外出を増やせるよう工夫を重ねたい。	利用者の家族の入居先に赴くなど、利用者の関係性を大事にするように、取り組んでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係には重きを置き、お互い助けたり、助けられたりという関係が自発的に生まれるように、会話の橋渡しや、レッテルを貼り合わないような支援などは常に心掛けている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入居者の退去後も移動先の施設や病院に、職員や他入居者が面会に行っている。家族にも、契約終了後であっても、いつでも相談に応じることができる事や気軽に来園して頂けるような声掛けを心掛けている。実際に退去後に来園される家族もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	9	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活での会話以外にも、センター方式を活用しながら、積極的に本人の想いの把握に努めている。今後も、拒否などの言動だけにとらわれることなく、入居者全員が出来るだけ本心を表出できるように支援していきたい。	日常生活において、個々の思いや希望により添える様に、日頃から注意深く接しており、得た情報は職員で共有し、本人本位が第一になるよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	事前訪問時や関係者からの情報収集、センター方式の一部分を家族に記入してもらう等により、より詳しい情報の収集に努めている。情報には、職員は必ず事前に目を通すとともに、必要に応じてケアプランに反映させ、その把握に努めている。今後はセンター方式を有効的に活用し入居後の状態把握にも力を入れたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居者のできる事・できない事の把握は常に意識し、センター方式の活用や会議において情報の共有を図っている。ただ、把握した能力の活用は不十分で、入居者が有する能力を最大限使い、自立した生活を送ることについて、話し合いが必要と感じている。		
26	10	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスは、出来るだけご家族に来園してもらい、担当者と共にプランについて話し合うことができるようにしているが、遠方にいる家族との話し合いは難しいのが現状である。今年度より、毎月送付する家族宛の手紙の中に、ケアプランとプランのサービス内容に沿った画像の添付をする事で、家族にも常々ケアプランを意識して頂けるような取り組みを始めた。今後はセンター方式活用方法の再確認をしながら、更に力を入れていきたい。	担当職員が日々の生活からプランを作成し、家族や他の職員の希望や要請、不足分を加味して計画とし、日々のモニタリングを重ねながら、介護計画の目標への達成にむけて取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、入居者一人ひとりの様子を記録に残し、受診等の重要事項は赤字で記入する等して、情報共有し易い様に工夫をしている。今後は、日々の小さな気づきでももっと記録に落とすことができるように意識をし、支援やプランに反映させていきたい。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	成年後見人制度の利用、公共交通機関を使った外出など、以前から続いている支援に囚われず、目の前にいる入居者にとって最善の支援策を考えるようにしている。今後、個々が必要とする他サービスの状況把握に努め、より多くの実践に移していきたい。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内の催し(お祭り、ゴミ拾い、ひな祭り会など)や、他施設のお祭りなどには積極的に参加したり、近隣のスーパーや喫茶店へ出掛けたりしながら、地域との関係づくりを意識している。喫茶店の店主は、時々施設に顔を出して下さる。また、運営推進会議構成員からの申し出により、施設の行事の際には、入居者支援の一旦を担っていただいている。		
30	11	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科医は週2回、歯科医は必要に応じての往診がある。他にも外科などの協力病院が幾つかあるので、必要に応じてご紹介できるが、それを強制する事は無く、入居時に確認する主治医や救急搬送時等の希望に沿いながら、その関係を継続できるようにしている。	利用者・家族の希望を尊重し、かかりつけ医を強制することはなく、納得をいただいた利用者に関しては、往診等の医療を提供し、専門医についても通院同行等で安全性に努めている	

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師はいないが、施設内外の研修を活用し、職員自らが医療知識を身につける努力をしている。また、主治医や家族とは常々相談し合いながら、入居者が適切な医療を受けられるようにしている。協力医の定期往診時には、事前に入居者の様子をFAXでお知らせし、往診がスムーズになるように工夫している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時には介護添書を提供し、入居者が安心して入院生活を送る事が出来るよう、また大きな状態変化が無い様に工夫している。入院中は病院や家族と密に連絡を取り合い、早期退院や退院後の生活について医師・家族・相談員・管理者等で話し合う機会を持つようにしている。		
33	12	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した際に事業所で出来る範囲について、事前の見学時や契約時に説明している。重度化による住替え時には早い段階から家族との話し合いの場を多く持ち情報の共有をすると共に、本人にとって最善の場所やタイミングについて相談している。終末期ケアは行っていない。今後は、重度化した際に事業所で出来る範囲について文章で表したものの必要性を検討していきたい。	基本的に看取り介護はしていないが、入所前に説明し了承を得ているが、終末期になっても出来ることは最善を尽くして対応している。書面にての説明も必要性を感じており、母体法人を含めて検討している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	施設内研修やマニュアルの整備により実践力を身につける努力はしている。今後は定期的な訓練の場や再確認の機会を積極的に設け更に実践力を身につけていきたい。		
35	13	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルは整備しいつでも確認できる状態にある。火災時の避難訓練は年4回行っており、そのうち2回は消防職員と地域住民の参加がある。火災以外の災害対策については、現在法人内においてマニュアルを整備中である。今年度、運営推進会議において、災害についての出前講座を開催した。	火災訓練は、消防指導の二回を含め年に4回地域住民の参加を得て実施している。備蓄品も隣接する母体施設に確保されており、火災以外の訓練マニュアルも整備中であり、より高い安心に向けて取り組んでいる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	14	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者は人生の先輩であるという事を常々意識出来る様に、職員間で話し合いの場も設けているが、無意識に馴れ合いが過ぎた声掛けや、目上の人に対する気持ちを忘れた声掛けをしていることもある。今年度は、専門職としての基本的な言動の徹底を事業計画にも挙げており、現在その是正に取り組んでいる。	介護の専門家として、介護側の態度や言動、利用者への敬意と尊厳等をどう考えるか、職員で話し合い、慣れや馴れ合いにならないよう取り組んでいる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	特別な事情がない限り、洋服や飲み物、食事の量など入居者が自己決定できる工夫は常に意識しているが、まだその機会は少ないと感じる。入居者自らが考え、動くことが出来る様に、職員間でその重要性を話し合っていくたい。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	今ある環境で努力はしているものの、入居者の希望をすぐその場で実践・支援できないことも多い。また、入居者の想いの汲み取りはもう少し意識して取り組み、一人一人が少しでも施設にいる意味や楽しい時間を感じる事が出来る様に努めたい。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出時には化粧やお洒落着を、普段も、季節と希望に合った衣類を着る事が出来るよう支援しているが、職員好みで選択することも多い。自己決定の重要性を意識したい。また、日常的なお洒落も、必要と感じることが多く、職員が率先してお洒落をすることで入居者への触発になると考えている。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	15	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	最近、食事の準備や片付けのみならず、自分で食べる物の盛り付けも一人一人出来る様に支援している。ただ、職員の力量や意識の差によりその機会に大差がある為、入居者の持っている力の把握とその活用について職員のスキルや意識を高めていきたい。食事での会話も増やしたい。	食事の準備から盛り付け、配膳、片付け等を自主的に行っており、また利用者お互いに個々の力を助け合いながら食事を楽しんでおり、さりげない職員の気配りが円滑に作用するなど、真摯な取り組みが見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立作りを業者に依頼し必要なカロリーを摂取出来る様にしている。食事量は全員毎食後に、水分量は必要に応じてチェックしている。衛生的な条件以外でも、飲食のタイミングは、まだ職員ベースのことが多い為、食べたい・飲みたい物を、食べたい・飲みたいタイミングで飲食できる、当たり前の環境になるように今後も工夫を重ねたい。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアは、起床時と就寝前は毎回、その他は必要に応じてその都度行なっている。		
43	16	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	必要に応じて排泄チェック表を記入し、一人一人の排泄のタイミングの把握に努めている。オムツ類の使用時は、十分に職員と家族で話し合いをして、過度な使用にならない様、本人の能力の妨げにならない様に取り組んでいる。	日常の仕草から排泄のサインを感じ取り、尊厳を傷つけないように配慮し、取り組んでいる。快適な排泄が出来る様に、繊維質や乳酸菌など検討し、また過敏な反応は避けながら、排泄の自立に向けて努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	必要に応じて排泄チェック表を記入し、一人一人の排泄のタイミングの把握に努めている。排便状況の把握が困難な方は、往診医と連携しながらその把握に努めている。便秘予防に関しては、朝食前に乳酸飲料や牛乳、食事に食物繊維の多い食材を多く取り入れたり、必要に応じて運動などを行なっている。		
45	17	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入居者から希望があった場合は、出来るだけ浴うようにしている。入浴したくない入居者に関しては、無理強いをせず、タイミングや声掛けの工夫を重ね、本人が入浴を楽しめるように配慮している。また、入浴中の会話も大切にしている。今後は、遠慮などにより入浴の希望を表出できない入居者にも配慮しながら積極的な声掛けをしていきたい。	週に2回以上を目安として入浴に取り組んでおり、お湯はその都度新しく入れ直し、豊かなお湯を楽しんでもらい、心と衛生面に配慮した入浴になるよう取り組んでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	現在眠剤を使用している方はいない。出来るだけ薬に頼らず、日中の活動の工夫や居室の音や光などへの配慮で良眠できるように支援している。昼夜共に就寝の時間は自由である。夜間良眠できていない入居者に関しては、その都度ホットミルクの提供や職員との会話など安眠への工夫を重ねている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師と協力しながら、無駄な服薬を減らす様にしている。入居者の服薬状況は一覧にして確認しやすい状態になっていて、職員は最低限、薬の目的は把握出来る様に努力している。薬の変更時には、職員が情報共有しやすいシステムづくりが課題である。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居者の生活歴や、一人一人の出来る事・できない事の把握は常に意識しているが、把握した能力の活用は不十分で、入居者が有する能力を最大限使い、施設に意味や楽しみを感じられる支援を心掛けていきたい。		

自己評価	外部評価	項目	自己評価	外部評価	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	18	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	入居者の希望をすぐに実践・支援できないことも多いが、今の環境において出来る範囲で支援している。職員だけの力に依らず、家族や地域住民の力も活用しながら、遠くへの行事やRUN伴への参加など以前より外出の機会は増えている。今後も、本人の希望の把握に努め、入居者が地域住民の一員として外出できるように支援していきたい。また、調味料の買い出しの機会をもっと増やしたい。	行事や外出には積極的であり、今夏にも行われたRUN伴にも参加し、利用者数人で区間を走り(歩き)沿道の喝采を浴びたりと発想と実行を大切に外出を楽しんでおり、さらに買い物や近隣の山菜とりなど、出来る事を拡大しながら支援に努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望と能力に沿って、お金の所持は自由であるが、買い物などでお金を使う機会は少ない。まずは入居者がお金を使う大切さについて職員一人一人が意識していきたい。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙や電話は自由である。個性豊かな年賀状の作成や、家族からの手紙に対する手紙や電話の返信の促しは、少しずつ増えているが、まだまだ足りないと感じる。意識していきたい。		
52	19	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内の保清も身だしなみととらえ、職員一人一人意識しながら取り組んでいる。意識が持続できるようにしたい。共用部分や居室には、写真や季節に合った装飾品を飾り、話題づくりや回想のきっかけに役立てている。また、無駄な音や色には特に常に気をつけ、入居者が混乱しないような配慮をしている。入居者が暑さ・寒さを肌で感じられるように、必要以上の温度調整はしない。	建物は森などの豊かな自然に接して建てられており、出来るだけ自然そのものが室内に満ちるように努め、過度な温度設定などを排して日常を支援している。施設内には華やかな装飾を抑え、行事の写真や利用者の習字など話題の提供程度とし、落ち着いた雰囲気や大事にする工夫が見られる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間と食堂は壁で仕切られている他、狭い空間を幾つも作り、グルーピングに配慮している。廊下の端にも少人数用のソファを設置し、他から少しだけ離れたい時に活用できる場所作りをしている。今後は、職員が促さなければずっと居室にいる入居者も楽しく過ごせる空間作りにも力を入れていきたい。		
54	20	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際は出来るだけ馴染みの家具を持込んでもらい、配置も工夫してリノベーションダメージが最小限になる様に配慮している。家具等が本人の混乱原因になる時でも、すぐに回収せず、その理由や家族の希望などを十分に検討したうえで実施する様にしている。それぞれが、個性溢れた居室となっている。	室内はそれぞれが工夫を凝らした配置となっており、家具類も使い慣れた物が点在し、自室としてゆったりと暮らせる様に、配慮された居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	使用方法がわかりづらい機械類は、入居者が一人で使える様に表示したり、洗濯干し竿を高い位置に設置し、自然に体や頭を使うことができるような仕掛けを作っている。居室内の家具等は転倒のリスクを考慮したうえで、入居者が自由にかつ安全に居室内の時間を過ごすことができるようにその配置を工夫している。		